

[特集1]

ミュージアム論

—ミュージアムの現在—

ミュージアムという制度は、現在大きく変貌を遂げつつあります。それはそもそも19世紀から20世紀にかけて全盛を誇った啓蒙学習空間であり、19世紀に諸科学・諸学問が自立するのと並行して発展してきました。しかしながら遅くとも20世紀の終わりから、新しい学知が求められているのと呼応して、ミュージアムも新しい形を模索しているように思えます。日本に限っても、美術館は言うに及ばず、葛西臨海公園水族館以後の水族館、そして旭山動物園にその一端を伺うことができます。今、ミュージアムに何が求められているのか、その理由は何なのかを考えようというのが、このシンポジウムの意図でした。

今回は気鋭のドイツ文化研究者、千葉工業大学の安川晴基さん、新津美術館の学芸員である荒井直美さん、そして新潟市美術館学芸員を務められ、現在、砂丘館館長の大倉宏さんにお集まりいただき、それぞれの立場からお話ししていただきました。

安川さんは、「歴史博物館と集合的記憶のマッピング：ドイツ歴史博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、〈テロのトポグラフィー〉」と題した講演で、20世紀末からベルリンに開館した3つの博物館をテーマに、それらがどのような背景で、何を目的として建設され、また、どのような議論があったかを詳細に論じてくださいました。歴史博物館と他の二館との建築デザインの違いがドイツ人の集合的アイデンティティ、自らの過去の想起の問題と密接に関わっていることを指摘されました。

荒井さんは、「新潟市新津美術館13年の軌跡」というテーマで、1997年に開館した新津美術館に当初から学芸員として携わられてきた経験をもとに地方公立美術館の限界と可能性についてお話してくださいました。新津美術館は地方の公立美術館としては活発な活動を続けてきていますが、当初目指された自主企画による「発信型」美術館という姿勢を、この間の財政的、組織的問題から見直さざるを得なくなったことを契機に、より来館者に近く、より地元に着目しつつ、なおかつ新津美術館らしさを失わない試みのいくつかを紹介してくださいました。アーティスト・イン・レジデンス活動によって地元の人々との共同作業を行ったり、あるいは学校などの施設に出前美術館を出したりといった試みを通して、「価値を創造する機能体」としての美術館を目指されている様子を生き生きとお話してくださいました。

大倉さんは、東京芸術大学美術学部を卒業されてから新潟の画家佐藤清三郎の絵を見て回る目的で新潟に来られ、その後新潟市美術館に学芸員として5年ほど勤務されました。フリーとなった後、画廊「新潟絵屋」を開かれ、さらに砂丘館を市民に開かれた展示施設として運営さ

れています。大倉さんのこれまでの歩みは、日本におけるミュージアムの問題とその解決の試みそのものと言って良いでしょう。今回は「住まい・画廊・美術館」と題されたお話の中で、美術館が観る人からあまりにも遠いと感じられ、観る人と絵画を近づけるための試みとして日本家屋に絵を「飾り」、それを「画廊」とされ、新潟の下町の町屋という、次第に取り壊され数が少なくなっている場をあえて記憶の場あるいは場所の記憶として絵画と融合させるというご自身の試みをご紹介くださいました。絵を飾るという点で「住まい」と「美術館」をつなぐものとして「画廊」を位置づけ、それを人々が気楽に絵に接する場とする美術展示三階論（住まいが一階、画廊が二階、美術館が三階）は、大倉さんの思索と実践が見事に一体化した論として聴く者に強い印象と感銘を与えました。

以上、簡単なながらシンポジウム「ミュージアム論－ミュージアムの現在」を報告いたしました。19世紀学研究の中でミュージアムを論ずるとどうしても抽象的になりがちであるという反省に基づき、今回のシンポジウムを企画したのですが、期待通りの、意義深いシンポジウムになったと喜んでおります。ディスカッションでは、新潟大学人文学部教授で新潟大学旭町学術資料展示館館長の橋本博文先生（考古学）にも加わっていただき、今後のミュージアムのあり方について議論を深めることができました。大学ミュージアムはどうあるべきかという刺激的な話題も提供されましたことを付記いたします。

（文責 S. K.）